ASSETS OF OUR LIVES

≪確かな知識や教養を身につけ・豊かな心を育て・充実した人生を!!≫

2021年12月02日　第35巻30号

ＮＥＷＳＷＥＥＫの「よりよい世界の実現に努力する日本人30名」という特集号から、一人の男性を紹介します。名前は杉良太郎。映画やテレビや舞台の俳優であり、歌手でもある、美男子（＝イケメンで）の、スパースターです。おそらくあなた達のおじいさんおばあさんたちは「遠山の金さん」や「水戸黄門」などのテレビ番組や、舞台俳優としては「流し目の杉様」としてご存知だと思いますので、尋ねてみませんか？　彼は、若い時から、自分の収入を、社会的に恵まれない人たちために数十億円という金額の寄付をし続け、更に東南アジアの、特にベトナムの子供たちの里親として、100人以上の子供たちを、自分の子供として育ててきておられます。１９４４年、時まさに「沖縄戦」が始まる前の鹿児島県徳之島生まれの母のもとで育った人物であり、「沖縄の悲劇」を体にしみこませ、そして若い頃起こった「ベトナム戦争」による、子供たちの苦しみを目（ま）の当たりにして、そして当時の多くの人たち同様に、極貧の青春時代を過ごされたがゆえに、俳優というとても派手で目立つ仕事をしながら、寄付活動や里親活動など、とても目立たない活動を地道にしてこられたのだと森は思っています。放蕩（ほうとう）な生活やギャンブルなどで破滅の人生を迎えることが多い俳優とは全く異なった、とても個性的で立派な方です。

【上】　冨永愛さんは、有名なモデルさんです。現在、女性の地位向上のために、国際連合の大使として、世界中を回って、発展途上国の妊産婦の手助けをする啓発活動をされています。このＮＥＷＳＷＥＥＫには、カンボジアでサッカーの指導をする本田圭介君や、現在の日本の在り方に対して多くの提言をされている、作家で医師の鎌田實さん、中村哲さんで有名な、「国境なき医師団」の看護師白川優子さんたちなども掲載されていますので、塾の本立てから手に取って読んでみませんか？

Special Report JAPANESE CHANGE AGENTS

を買って服を作り、着たり売ったりするサイクルを教えた。「お金を寄付してもそれだけで終わる。だから自活できる道をつくっていった」。ただ、そうした取り組みだけで、子供が本当に満たされるわけではないことを知る出来事があった。

「お菓子やおもちゃを持って行っても、見ているだけの子供たちがいた。なぜ食べないのか聞いてみると、『お父さん、お母さんが欲しい』と言った。何かあげれば喜ぶと思っていたが、人間はやはり愛情に触れたいのだ」と気付いた。そこで杉は、子供たちを里子にすることに決めた。バックラー孤児院の子供全員を里子にし、その数が現在は冒頭の152人となっている。

思いと心を乗せた援助を

その活動資金のほぼ全額を、杉は自腹で賄ってきた。「海外で多くの公演をやってきたが、1回も利益を目的とする興行をしたことはない。全部チャリティーだった」と言う。そんな杉をアメリカの「チャリティー王」ボブ・ホープは「あなたは日本のチャリティー王だ」と称賛した。

数十億円という金額は、決して道楽で出せる金額ではない。「芸能人は金持ちなんだろう」と思われることもあった。実際には資金を捻出するために多くの資産を抵当に入れて銀行から融資を受け、「自分の体を担保にして1億円貸してほしい」と直談判しに行ったこともある。

それでも「自分に力があれば、もっと助けられたと感じる」と言う。映画「シンドラーのリスト」で、多くの人命を救ったシンドラーは最後に「もっと救えた」「もっと金があれば」と語る。「その気持ちは本当によく分かる」

どうして、そこまで慈善活動を続けるのか。「みんなに言われる。裏があるんだろうと思われる」と話す杉だが自分でも理由は分からないという。「まあ、そういう人間もいるんですよ」

そもそも、相手国から来てほしいと言われたこともない「全部押し掛け。自分で『これはやらなきゃいけない』と考え、相手の国に問い合わせて費用は自分で出すと言うと『それなら来てください』と言われて行っている」

ただ、「自分の目で孤児院や盲学校の状況を見ると『俺が援助する』となる」という彼の言葉からは、目の前で困っている人や苦しんでいる人を放っておけないという愛情が感じられる。

杉自身、「愛で、全ての問題は解決できると思う」と語る。だから支援にも、愛情や優しさが必要だとする。「ぼんとお金を寄付するのもありがたいことだが、私は後々まで見届け、人の思いと心を乗せた援助をすることを心掛けている」

また何十年も芸能界のトップに居続けたからこその思いもあるようだ。「神様がひとつだけ願いをかなえてくれるなら、『人の心の真実を教えてください』と願う。（彼らの）本当の気持ちが知りたい」と、杉は言う。「施設の人たちには虚栄心も忖度もない。ストレートに反応してくれる。そこに真実の涙や笑顔がある。それはお金を出して買えるものではない」

ベトナムにいる152人の里子とは頻繁に会えるわけではない。それでも、「いつも思いを寄せているし、心配している。それが愛情だ」。

Ryotaro Sugi
杉 良太郎
» 歌手・俳優

慈善活動に生涯をかけて巨費を投じた「杉様」の信念

親としての愛　ベトナムのバックラー孤児院では現在でも入所する全員を里子にしている（写真は1989年の初訪問時）／少しでも自活できるようにとニワトリ（左ページ）やブタを施設に寄贈

里子の数152人、投じた私財は数十億円以上――。歌手・俳優として活躍する杉良太郎は、個人として「桁違い」の規模で慈善活動に打ち込んできたことでも知られる。

国内ではデビュー前だった15歳の頃から刑務所や老人ホームへの慰問を始め、法務省特別矯正監や麻薬追放協会会長を務めるなど幅広く活動。その功績から、紫綬褒章や緑綬褒章を受章し、文化功労者にも選ばれた。

一方、国外で活動を始めたのは27歳のとき。アジア諸国やアメリカ、ブラジルなど世界中でチャリティー公演や孤児院・障害者施設への援助を行い、文化交流もしてきた。バングラデシュでは約50の学校の建設、ミャンマーでは孤児数百人の食事の世話や救急車の寄付と、億単位の資金を多くの国で費やしてきた。

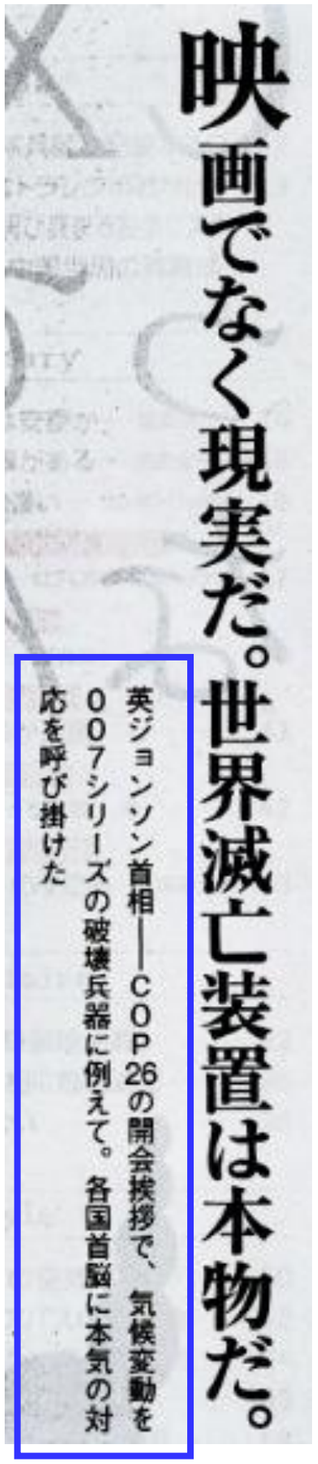
なかでもベトナムとは、現在まで深い縁でつながっている。1989年の初訪問時、チャリティー公演で杉はベトナムの平和と繁栄を訴えた。同国が西側の文化交流団を受け入れるのは初めてだったが、要人たちはベトナムのことを思う杉の姿に感銘を受け、当時のド・ムオイ首相は「日本のような国になりたい」「世界で一番、日本語が話せる国になりたい」と、杉に語った。

そうしてベトナムに引き込まれていった杉だが、当時の同国は度重なる戦禍で荒廃し、貧困問題も深刻だった。首都ハノイにあるバックラー孤児院で、杉は衝撃を受けたという。子供たちが「食べていたのは1食1円のもの。カビが生えた米に、その辺の草と塩だけが入ったお吸い物、1センチ四方の魚のかけらが2枚だけ」だったと回想する。

そこで杉は自ら市場でニワトリやブタを買い、小屋を建てた。それを育てて食べるだけでなく、売った金でミシン

現代が学べる　志　成　館

２０１６年１１月に、イギリスの北部都市のグラスゴーで開催されたＣＯＰ２６（国連気候変動枠組条約第２６回締約国会議の事で、ＣＯＰとはこの名前の最後の方の Conference of the Parties　の頭文字です。誠実な科学者や、グレタ・トゥーンベリさんが評価するように、「完全な失敗である」ということは間違いないでしょう。しかしこの問題は、先進国による長い「植民地支配」という歴史の問題解決と密接につながっています。つまり、中国やインドやアフリカ諸国や中南米諸国が、二酸化炭素排出制限交渉で先進国の主張に合わせようとしないのは、長い間これらの国が、先進国の植民地として略奪をされ搾取をされてきたことへの恨みつらみがあるので、話はそんなに簡単ではないということです。西欧やアメリカへの移民の問題も、根本の問題は同じで、これを解決するには、先進国がその富のかなりの莫大な額を発展途上国に配分するなどの事をしない限り無理だと思いますし、先進国がそのような事をするとはとても考えられないからです。経済的に苦しい今の日本国の日本人のあなた達は、たとえば２０兆～３０兆円を、日本の税金から支出することに同意ができますか？とても無理ですよね。ですから、このままでは人類が破滅することは免れないのです。今から２０年を過ぎた時点で「あの時こうすればよかった」などといっても手遅れなのですが。この面では、ＮＥＷＳＷＥＥＫやＴＩＭＥの記事や写真を載せます。



【上】日本がなぜ２回連続して恥ずべき「化石賞」をもらったかを教えます。それは、テレビでトヨタ自動車が「水素ガスエンジンの自動車をつくれば、排出ガスはなくなって水だけになる」と宣伝をし、岸田総理もＣＯＰ２６で同じようなことを高らかに演説されたのですが、実際には、「水素ガス」をつくるためには多量の石炭火力による発電が前提になるのです。それにもかかわらず、このことを知らない「無知さ」を、世界中に宣伝してしまったからです。
【上】今の日本の考え方は、上の挿絵の様に、「地球が沈んでも産業を守る」と言っているのと同じだということです。上の記事はＮＥＷＳＷＥＥＫからです。

【左】【下】ＴＩＭＥには、現在の世界の二酸化炭素排出量の規制問題に対するたくさんのアジェンダ（提言）がなされています。週刊誌「ＴＩＭＥ」は意外と公正中立な週刊誌だと思いませんか？　小・中学生のあなた方は、しっかりと英語を学んで、世界の「今」の問題点が、早くわかるようになってください。もう時間はあまりないのです。

※　エリザベス女王やバイデンさんやインドのモディさんやグレタ・トゥーンベリさんたちが、降りしきる雪や雷鳴の中でたたずむ表紙の写真のＴＩＭＥという表題の下の Last call　という（黄枠の中にあります）言葉は「最後の叫び」という意味で、「人類がなし得る最後の会議」であったという意味だと思います。

CLIMATE IS EVERYTHING

THE COP26 AGENDA

COP26, shorthand for the 26th Conference of the Parties to the United Nations Framework Convention on Climate Change, is in many ways as wonky as it sounds. For two weeks in early November, negotiators from nearly 200 countries will gather in Glasgow to debate the granular details of how best to put the world on a path to tackle climate change, hashing out everything from carbon markets to transparency mechanisms.

Alok Sharma, the official charged with leading this year's U.N. climate-change conference, knows how inaccessible this can all sound. He describes himself as a "normal person" in the climate space rather than a longtime "eco warrior." But in nearly two years of planning for this summit, Sharma says he has come to understand the urgency of the crisis firsthand, visiting frontline communities hit by hurricanes, flooding and drought. "It's really quite emotional," he says.

The overarching goal is to limit global temperature rise to 1.5°C above preindustrial levels—or at least do enough at this meeting for such a goal to stay within reach. That's the threshold at which scientists say the world is likely to experience a range of catastrophic impacts and irreversible tipping points that would transform the climate, and life on earth, as we know it. To put the world on the path needed to avoid such disaster, Sharma and his team have broken down the goals of COP26 into a handful of digestible objectives, from advancing climate finance to slashing coal and growing the deployment of renewable energy. "This is going to be a decisive decade," he says. "We need to get this right." —Justin Worland

1. Restore and protect the ecosystems that make human life possible

ELISA LONCON ANTILEO

Alongside our thirst for fossil fuels, humans' destruction of nature has triggered the climate and ecological crises that now threaten our life on this planet. A major goal for delegates at COP26 is to improve humans' relationship with nature: to restore forests and wetlands to absorb more carbon; slow the loss of animal and insect species that are vital to our food systems; and protect the rivers and springs we rely on for water.

Elisa Loncon Antileo is leading an attempt to rebalance that relationship and transform humanity's approach to the natural world in her country of Chile. In July, she was elected president of the 155-seat constitutional convention that the South American nation launched to rewrite its dictatorship-era constitution. The process began after 2019 protests against the country's market-focused economic model, which critics say drives both inequality and an unsustainable exploitation of natural resources.

Loncon, a linguist and literature professor from Santiago, is part of Chile's Mapuche community and occupies one of 17 convention seats reserved for Indigenous people, and one of her priorities is to bring indigenous thinking on the environment to the constitution. "There's a development model that's based on seeing nature as a resource for humans—especially men—to exploit and dominate," she says. "But indigenous people have always had the philosophy that humans are interdependent with nature and must conserve nature as a mother."

Perhaps the most urgent environmental question for Chile's constitution is about who gets access to water resources. The country has suffered a punishing decade-long drought, and the privatization of water rights since the 1980s, under the current constitution, has allowed businesses to alter the course of river basins and pump water out of the land for mining projects, leaving large regions dry.

Loncon grew up in a community of subsistence farmers in the province of Araucania and recalls cultivating the land and going to get native fruits—such as dark purple maqui berries and small banana-like chupones—from a nearby mountain. Now, thanks to the diversion of water to industrial eucalyptus and pine farms, she says it's much harder to find those fruits, or to live that kind of life. And as climate change continues to exacerbate dry seasons, it's only bound to get worse.

Loncon says the world can learn from the inclusion of Indigenous voices in Chile's constitutional project as it accelerates efforts to deal with climate change. "We're pushing the rights of Mother Earth into the conversation. From my point of view, it's an opportunity for Chile and the world in general to adopt values from Indigenous thinking." —Ciara Nugent

2. Ensure a rapid and equitable transition away from coal

CHIBEZE EZEKIEL

Coal is one of the dirtiest energy sources in use, and coal plants still generate 38% of the world's electricity. One strategy is to stop them from getting built in the first place, and Ghanaian activist Chibeze Ezekiel has had some success there. In 2013, he'd just returned from a climate conference in Istanbul when he learned Ghana's government had started discussing a proposal to build a large coal power plant, the country's first.

His organization, 350 Ghana Reducing Our Carbon, began visiting the communities where the proposed plant would be built, educating villagers about the potential effects on local rivers, air quality and groundwater supply, and the consequences for their health. They also told locals about the declining costs of renewable energy. "We were not just saying no to coal; we were offering an alternative," Ezekiel says.

By the time the government pitched the proposal to the local community in 2015, they were prepared to challenge official assertions. Ezekiel calls it his "submarine approach." "We came out of nowhere to bombard them from all angles—social media, press conferences, community forums." And it worked. On Oct. 10, 2016, Ghana's Environmental Minister announced that the coal plant would not be built. Less than a year later the nation's President said that all new power projects would use renewable energy only. Ezekiel is especially proud of that. "If we had allowed a coal plant to be established in 2015, I am sure there would have been more." —Aryn Baker

Chile is rewriting its constitution, and Loncon wants the new document to reflect Indigenous thinking on how to coexist with the natural world

60 TIME November 8/November 15, 2021

7 Questions

Sylvia Earle The marine biologist on her new book, how heavy fishing increases carbon dioxide and getting to know lobsters as individuals

You have written several books about the ocean. Why this one, National Geographic Ocean: A Global Odyssey, and why now? This book is my attempt to sum up what we now know about the ocean and make it accessible in digestible bites. If you've got 10 minutes, you can sit down and learn something, with beautiful images.

Why is the ocean so important? The ocean is where the action is: 97% of the earth's water is in the ocean. It's where 95% of the biosphere is. If I were an evil alien wishing to alter the nature of life on earth, I would change the temperature of the ocean, I would change the chemistry. That is exactly what we are doing: excess carbon dioxide in the atmosphere becomes excess carbon dioxide in the ocean that becomes carbonic acid. The ocean is becoming more acidic. That changes everything.

What is the single most important thing we can do for the oceans today? Right now a disproportionate bite out of the ocean is being taken by a relatively small number of countries doing industrial fishing. We've got to get over this idea that wildlife from the ocean is essential for our food security. What we are just beginning to understand is the high cost of eating fish. What does it take to make a pound of tuna? A lot of halibut or cod. What makes the halibut? Smaller fish. What do they eat? Krill. Krill eat phytoplankton, zooplankton. Over the years, thousands of pounds of phytoplankton make a single pound of tuna. So that tuna is expensive in terms of the carbon that it has captured. The more fish we take out of the sea, the more carbon dioxide gets released into the atmosphere.

We were all awed by the relationship in the documentary My Octopus Teacher. Have you ever experienced something similar? I've had the privilege of living underwater on 10 different occasions. It has enabled me to get to know individual moray eels, individual groupers, even individual lobsters. They all have faces; they have attitudes. They have sensory systems much like our own. And yet we somehow harden ourselves to think they don't feel pain. We pride ourselves on being "humane," but it doesn't translate to the way we treat animals in the sea.

We've seen our hottest decade since recording began, rising emissions and major losses of coral reefs. What gives you hope? Yes, half the coral reefs are either gone or are in a state of sharp decline. The good news? We still got about half of them left. We can reverse to a very large extent the harm we have imposed, because now we know. Knowledge is the superpower of the 21st century. Even the smartest people alive when I was born did not know what 10-year-olds today have available to them. That's truly cause for hope.

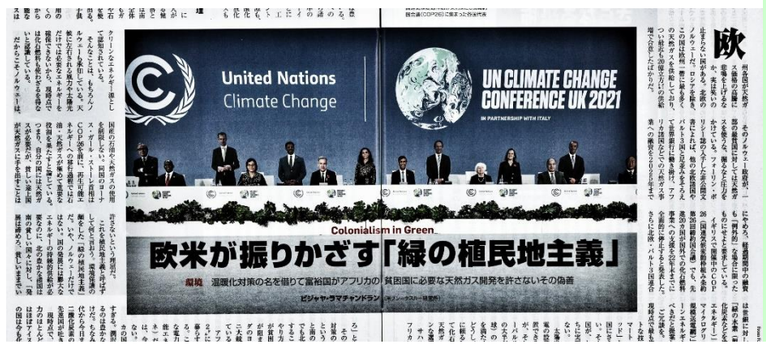
Ocean advocates have set a goal to protect 30% of the ocean by 2030, up from less than 3% today. What will it take to get there? COVID-19 showed us we can change quickly when our lives are threatened. Climate is no different. Our very existence is on the line. The ocean is the blue heart of the planet; 30% by 2030 is a good start, but I say half, as soon as we can get there. How much of your heart do you want to protect?

What do you say to those experiencing climate anxiety? It would be so easy to say, "Why bother? The problems are so big that there's nothing I can do; I might as well enjoy myself for the time I've got." But it's only hopeless when you give up. Change happens because of individuals who team up with others or inspire others. And soon you've got 10 or 100 or 1,000, and then you've got a movement. —ARYN BAKER

"THE OCEAN IS BECOMING MORE ACIDIC. THAT CHANGES EVERYTHING."

96 TIME November 8/November 15, 2021

【左】アメリカの海洋生物学者のシルビア・アールさんのＴＩＭＥからの記事です。海洋のプラスチックごみの事が世界中で問題となっていますが、それ以上に「海水の酸性化が進んでいる事」の方が問題であり、「世界のすべてを変えてしまうであろう」と話しておられます。


United Nations Climate Change

UN CLIMATE CHANGE CONFERENCE UK 2021

IN PARTNERSHIP WITH ITALY

Colonialism in Green

欧米が振りかざす「緑の植民地主義」

【左】欧米で、地球環境を守る運動が展開されているが（【右】）しかし、この地球環境をめぐる運動の中でさえ、「先進国による、発展途上国に対するいじめ」が、これまでの５００年の歴史と同じように繰り返されているではないか、というＮＥＷＳＷＥＥＫからの記事です。それほど世界の国民国家は、自国の利益しか考えていないのです。グレタさんの悩みやジョン・レノンの「国境がない社会を」という叫びの意味がわかるでしょう？